

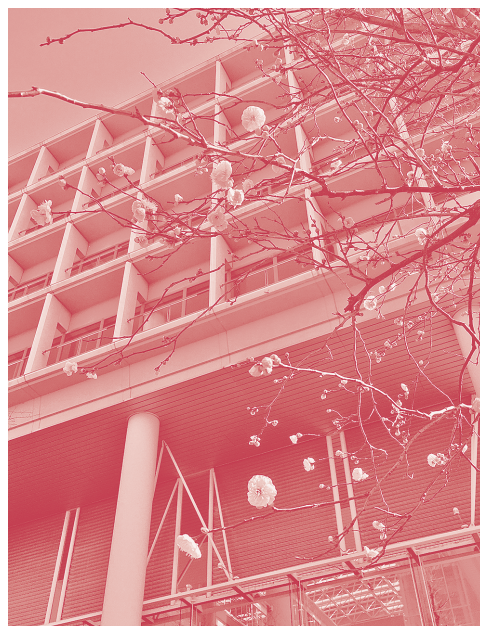
Newsletter 36

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第36号/2020年5月15日発行

Contents

- 巻頭言 連れ出せ、教養！
- 特集Ⅰ 「基盤研究」
- 特集Ⅱ 「高大連携プロジェクト」「実験授業」
- 特集Ⅲ 【教養研究センター設置科目】 身体知・音楽／生命の教養学／日吉学／身体知／アカデミック・スキルズ／学習相談
- 特集Ⅳ 「情報の教養学」「研究の現場から」
「コレギウム・ムジクム・オペラプロジェクト2019」
- 特集Ⅴ 「創造力とコミュニティ研究会」「日吉行事企画委員会（HAPP）」
「教養研究センター選書」

新型コロナウイルス感染症流行にあたっての教養研究センターの姿勢について
私の〇〇自慢



連れ出せ、教養！

2020年度「庄内セミナー」実行委員長
鈴木亮子（経済学部）
Ryoko Suzuki

NHKの「プロフェッショナル 仕事の流儀」という番組では、様々な分野の最前線にいる人が密着取材を受け、最後に「プロフェッショナルとは」という問いに答えますが、各々の人生の時間と経験に裏打ちされしかも毎回異なる答えに、思わず唸ります。

そして2003年から発行されてきたこのニューズレターでも同じことが起こっています。17年間に複数の教員が「教養」観を記していますが、どれもハッとする洞察と滋味に満ち、しかも全く異なる表現で読む側の気持ちを揺さぶります。（センター事務局にあるバックナンバーをご覧ください！）

私は3月の予定が新型コロナウイルスにより吹っ飛んだので、「教養」という言葉がどのような人生（言葉生？）を辿ってきたのかを少し調べてみました。日本国語大辞典によれば「教養」は明治の頃「教え育てること。教育」という意味で使われたとのこと（国立国語研究所「日本語歴史コーパス」にも19世紀末には「教養する」という動詞形や「やしなう」「そだてる」というルビが振られた例あり）。そして今日一般に通用している「学問、知識などによって養われた品位。教育、勉学などによって蓄えられた能力、知識」とい

う意味は20世紀以降に主流になったようです。

そこで朝日新聞記事データベース（聞蔵IIビジュアル）で「教養」が記事の見出しでどのように使われてきたかを見てみると、1900年代初頭の「子供の教養」「娼妓を教養」などでは「教育（する）」という意味で使われています。しかし「教養」という語が大学教育や大人の品格などとの連想で語られる現代を生きる私には、「子供の教養」という表現が新鮮な説得力を帯びて映ります。幼子のもつ鋭い観察眼や柔軟な捉え方に学ぶことは多く、子供たちは教養を駆使して生きているとさえ思えるからです。

さて終戦1か月後には、われらが「教養」はトップ記事を飾ります。「文教再建の施策決る 教養、道義向上へ」というその記事は、教科書の抜本的な改変や「国民の教養を深める」動きに触れています。しかし1945年以降は、教養学部、教養書、一般教養、教養特別番組など複合名詞の一部としての使用が急増、主たる用法となります。他の名詞と共に起し続ける中で「教養」の独立性が弱まったと見るのは大げさでしょうか。

少なくとも今日の新聞見出しにおいて「教養」という言葉は、高等教育や勉学で得る知識や「特別さ・高さ・深さ・広さ」との結びつきを強め、枠の中でかなり窮屈そうです。そんな教養を枠から連れ出し解き放って、豊かな人生の時間を共に過ごしたいと思いません。このセンターの活動に乗って。



基盤研究

文理接続プロジェクト 医学史と生命科学論

第4回：医療費の増加と医療の経済評価（後藤 励）

第5回：『フランケンシュタイン』とシェリーの天才論（小川 公代）

第6回：「日本イデオロギー」としての科学と技術—日本ファシズムにおける「文系」と「理系」の混淆の仕方についてのイントロダクション（片山 杜秀）

「文理接続プロジェクト」は2019年度の秋学期も、春学期に試みた3回から構成するパターンでした。10月、11月、12月に、それぞれ異なったジャンルの第一人者の先生方に、専門性と一般性の双方の魅力を持つご講演をお願いするという形です。

10月8日には後藤励先生（慶應義塾大学大学院経営管理研究科）をお招きしました。京都大学の医学部と経済学研究科の双方を学ばれたMD・PhDと呼ばれる若手の指導的な研究者・教育者です。ご講演は医療経済学の視点をとり、日本の医療を他の先進国と比較したときの医療費の分析であり、患者側と医療者側の需要と供給をいくつかの角度から検討するものでした。

11月5日には小川公代先生（上智大学外国語学部）にご講演をいただきました。小川先生は傑出した英文学者の一人で、雑誌の連載などで著名となっています。ご講演では、

19世紀の初頭に書かれ、現在のSFの古典となった『フランケンシュタイン』を取り上げ、科学、医学、人体、生命などから「天才」という重要な概念があらわれるありさまを取り上げました。

12月17日には片山杜秀先生（慶應義塾大学法学部）にご講演をいただきました。片山先生は日本の戦前の政治思想史研究の第一人者であり、数多くの研究書を出版しております。ご講演では、国民総動員の時代に、どのような科学、技術、医学に関する思想が、当時の指導的な知識人たちに取り込まれたのかという分析が提示されました。

いずれも優れた講演であり、ディスカッションもめざましいものでした。この基盤をどのように発展させるのか、2020年度以降の課題になります。

（鈴木晃仁）

講演会no.5 南條史生 アート：見えないものを見る

2020年1月15日、日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペースにおいて南條史生先生によって基盤研究講演会第5回目が開催されました。当日の司会是小菅が行いました。南條先生は、慶應義塾大学経済学部および文学部哲学専攻美術史学専攻を卒業され、国際交流基金（1978～1986年）を経て2006年11月より2019年末まで森美術館の館長を務められました。過去に様々な国際展覧会に関わる一方、森美術館にて自ら企画者として携わった近年の企画展に「医学と芸術展：生命（いのち）と愛の未来を探る—ダ・ヴィンチ、応挙、デミアン・ハースト」（2009～10年）、「メタボリズムの未来都市展：戦後日本・今甦る復興の夢とビジョン」（2011～12年）、「LOVE展：アートにみる愛のかたち—シャガールから草間彌生、初音ミクまで」（2013年）、「宇宙と芸術展：かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」（2016～17年）、「建築の日本展：その遺伝子のもたらすもの」（2018年）、「未来と芸術展：AI、ロボット、都市、生命—人は明日どう生きるのか」（2019～20年）があります。また、近著に「疾走するアジア—現代美術の今を見る」（美術年鑑社、2010年）、「アートを生きる」（角川書店、2012年）があります。当日の講演主旨を南條先生は、以下のように説明されています：「…クリエイティビティーとは、ルールに従うことでなく、ルールを疑

い、新しいルールを提案することです。（中略）アートは現代においては、もはや絵画と彫刻のことではなくなっています。それは、ものの考え方なのです。たとえばアートとデザインの違いは、デザインは問題解決の方法だが、アートは問題提起が本質であるといわれます…。」

南條先生は、この主旨にそって事例を挙げつつ説明されましたが、“ものの考え方において独創的であるべし”というのは教養の究極的目標かもしれません。当日は、学生のみならず教員も含めて150名以上が集まり、南條先生のたいへん刺激的な講演と質疑応答によって充実した研究講演会となりました。

（小菅隼人）



高大連携プロジェクト

<教養の一貫教育> no.3

雪雄子身体表現ワークショップ報告

2019年11月26日と27日の両日、日吉協育ホールでおこなわれました。申し込み制のワークショップで、塾高生、大学生、教員を含めて13名の参加がありました。これは、2019年5月30日「新入生歓迎行事：吉増剛造、後輩たちに語る—慶應義塾のこと、新作映画『幻を見るひと：京都の吉増剛造』のことなど—」、2019年10月31日、「中国の宝塚・越劇—実演と解説 教養の一貫教育Vol.2」に続いて2019年度3回目の高大連携（教養の一貫教育）です。このワークショップでは、雪雄子（1950年生、青森県在住の女性舞踊家）を講師として、自らの体を見つめなおすワークショップを二日間行いました。雪雄子は1970年代から80年代にかけて、女性舞踏集団「鈴蘭党」を主宰した女性舞踏手のパイオニアです。当日は、講師の指導によって自ら動き、人の動きを見ることで、自分の身体を開放し、より豊かな身体感覚を養い、有効な身体表現を学ぶ実践的講座をおこないました。雪雄子は今回のワークショップに当たって、次のようなメッセージを寄せています：「私の暮らす、岩木山麓の谷間に風が吹きささぶ。雪が降りはじめ、

ゆっくりと降り積もる。11月、結氷した沼地に白鳥たちがやってくる。まるで神の翼が舞い降りたかのように。3月、白く白い宇宙交響を沼地に遣し極北へと旅立つ。—私の内部に育った白鳥も、共に。」雪雄子のワークショップは心身を開放し、二日目最後には、白鳥のように飛び立つことを目指しましたが、参加者全員が見事に「飛び立った」ように感じました。個人の中に湧き出た教養の湧水はやがて大河となって豊かな人生を形成します。「教養の一貫教育」は、高校／大学間で途切れることのない教養教育を目指すプロジェクトです。

（小菅隼人）



実験授業 「機械（マシン）で学ぶくずし字」（はじめの一步） シンポジウム「マシンと読むくずし字—デジタル翻刻の未来像」

AIを使って、昔の人が書いた「くずし字」を読む試みが多方面で行われています。システム開発の現状がどうなっているのか、また「くずし字」を読むという作業がどうということなのか、理系と文系の架け橋になることを目指して、両者がともに教える・学ぶ実験授業を行いました。授業は90分2コマ連続の授業を3日間。内容は、AIを使ったシステムによるくずし字読解（9月28日・11月2日）と日本の古典籍を斯道文庫で学ぶ特別授業（10月19日）。講師は、宮川真弥氏（天理大学附属天理図書館）、大澤留次郎氏（凸版印刷株式会社）、佐々木孝浩氏（斯道文庫）、津田真弓（経済学部）。

凸版印刷株式会社が開発中の「凸版くずし字OCR」は、教育ツールとして実験授業の間も進化し続け、システムと人間の半学半教の時間になりました。また斯道文庫の貴重書を使った授業では、デジタルの情報提供では伝わらない、本という素晴らしいメディアの本質に触れる機会となりました。

慶應生を対象にしたこの実験授業に学外から多くの問い合わせがあり、それを受けて2月8日に、こうした最前線の状況を共有、理解し、デジタル上で行う翻刻——くずし字を読んだ後の作業——の未来をともに考えるシンポジウムを行いました。司会者は上記宮川氏、登壇者は上記大澤氏、津田のほか、社会参加型翻刻プロジェクト「みんなで翻刻」の橋本雄太氏、国文学研究資料館でデジタル関係の事業を担当されている海野圭介氏。システムを体験できることもあり盛況だったシンポジウムは、ライブ配信でも多くの視聴者を得ました。報告書と録画を公開中です。
<http://user.keio.ac.jp/~sakura/kuzushiji/>

（津田真弓）



身体知・音楽

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」は、2019年度においては従来通り2つの授業が開講されました。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」です。これら授業は、株式会社白寿生科学研究所からの寄附を受けた寄附講座となっています。2019年度秋学期においては、それぞれの授業において充実した教育が行われ、年度末に成果発表演奏会が行われています。楽器クラスでは、2020年1月18日に藤原洋記念ホールにおいて、「音楽で出会う諸国の人々」と題された演奏会が催されました。横浜市と提携されたイベントであるということもあり、地域住民を含めた多くの方々に来場していただきました。慶應義塾の社会貢献活動の一環としてこの授業が広く認知されていることが確認できました。同様に合唱クラスも、授業期間外となりましたが、「3つの世紀の合唱曲で綴る 音楽と平和」と題した演奏会を2020年2月7日に開催しました。(石井明)

「日吉学」の出発

試行錯誤の長い期間を経て、ようやくコーエーテクモホールディングスの寄附講座正規科目になり、最終発表会には襟川社長と浅野専務から発表と論文の優秀者に賞が授与されました。

2019年度のテーマは「縄文編」。縄文時代を体感すべく、日吉を歩き高低差を感じ、縄文の遺物(貝殻、土器など)を手に取り、縄文の地層の花粉を顕微鏡で観察し、当時の自然環境を学びました。次に「縄文人の食」をどんぐり集めと試食によって体験、さらに地形発達史の第一人者、松田磐余氏(関東学院大学名誉教授)の講義で視野を広げ発表準備へ。

学生からは「[驚き]を[学び]に変えていく授業」、「学部学年問わず幅広い学生が深め合う刺激的な場」、「フィールドワークを通して資料を読んでもわからないことに気づき、学ぶ=読むだけではないと全身で理解した」などの嬉しい声が寄せられました。

(不破有理)

生命の教養学

2019年度の「生命の教養学」のテーマは「生命の経済」でした。わたしたちの生命は労働を起点とする経済的サイクル(生産、消費、交換、共有、分配)と不可分ですが、それだけではありません。古代ギリシア語の「家oikos」と「法nomos」を語源とする「家政oikonomia=経済economy」は、広大な自然の秩序から微細な個体内部の秩序にいたるまで、さまざまなレベルの秩序を比喩的に表す言葉でもあります。こうした認識を前提として、「万学の祖」アリストテレスから現代の社会政策、数理ファイナンス、臨床心理学、行動経済学、西洋経営史、政治人類学、環境化学、生物化学、生物学の哲学、フランス思想・文学へと展開した11回の連続講義では、毎回のように講師と学生のあいだで活発な質疑応答がなされました。多くの学生がこの授業を通して、分野横断的な知の醍醐味を体感してくれたことを確信しています。

(西尾宇広)

夏季集中講座 身体知

—創造的コミュニケーションと言語力

2019年度の授業(8月12日から17日まで)では「自己と他者」をテーマに、味わいの異なる4作品を身体を通して読解しました。男女のちょっとしたすれ違いを小気味よいテンポで描いた、ブルース・イアソン作の「アパラチアン・トレイル」。私たちの中に根付く偏見を白人と黒人双方の視点から描いたラリー・フレンチ作の「ミスター・マムスフォード」。ある事件を客観的に描きながらも異なる人々の経験を並列させたハナ・ボトミー作の「海流」。そして移民と言葉と経験の問題を美しい文体でつづったジュリア・アルバレス作の「スノウ(雪)」です。2019年度も演劇や絵、そして体でリズムを取るなど様々な活動を通じて物語の世界を体感していきました。最終日はこの6日間の学びから個人やグループで創作発表会を行い、一般の参加者と共に授業の成果をシェアしました。

(横山千晶)

教養研究センター設置科目



2019年度の設置科目の授業は概して順調に行われました。センター設立当初から設置科目の中核である「アカデミック・スキルズ」は、近年では他大学での類似授業も増え、「老舗」としての自負をいよいよ高めているところですが、時代の変化は、新たな授業の形態や内容を求めています。

(片山杜秀)

2019年度のアカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションへの出場者は8名で、最後に来場者の投票により決まった各賞の結果発表、表彰と講評が行われた。論文コンペティションの結果発表と講評も行われた。プレゼンテーションにも論文にも言えるのは、扱われたテーマが実に多岐にわたり、かつ、どれもが学際的だということである。これは、自分たちの社会が現在どのような状況にあるのか、どのような過去の経緯によって今のような形になり今後どうなるのかという広い視野と展望を、学生たちが持っていることを示している。また、ここであらためて、コンペティション準備にあたる実行委員会の重要性を特筆しておきたい。一言一句まで厳密に決められた司会者たちのセリフや、経過時間を秒単位で記した進行表を見るだけで、実行委員たちがどれほど綿密な準備をしたか容易に想像される。実際に当日は、委員長、司会者、タイム



アカデミック・スキルズの魅力

アカデミック・スキルズの魅力は、なんといっても、授業案内通り「論文の書き方」を学べる事です。論文では、論理の飛躍や根拠のない推察は絶対に許されません。言葉遣いも細部まで気を払います。当然のことではありますが、これらをケーススタディできたのが、この授業でした。

ケーススタディができたのは、一人ひとりの学生に対して真剣にフィードバックして下さる教授陣がいたからに違いありません。テーマ選びから草稿に至るまで、非常に丁寧に見てくださります。これにより、論文の性質や自分の論文テーマに対する理解が深まると同時に、スキルも向上でき、自分の強みとなりました。改めて感謝申し上げます。

(法学部2年 鐔京香)

楽しい試練を経て得たもの

アカデミアに対する見識も経験もない私にとって、アカデミック・スキルズの授業は随分と楽しい試練でした。先生方に指導を請い、近い志を有する学生の皆さんと議論を交わし自己の思考を整理する過程は、私の知的欲求を満たすには留まりませんでした。一方で、悩みも数多くありました。特に、どのようにして先行研究に敬意を払い、独自性を論文に担わせるのか。ひたすら文献を読んで、自分の無知さに呆れる日々でした。最近はこの課題に応えるべく、同士と勉強会を行っています。

こうした私の学究心はこの一年のみで大きく築かれ、それには本講座の存在が強く影響したと実感します。ゆえに、携わった全ての皆様に心より感謝の意を示したく存じます。

(経済学部1年 白井颯太)

キーパーをはじめ、姿を見せず働いたメンバーも含む全員の有能さによって万事が遅滞なく円滑に進行した。このコンペティションが、出場者、来場者、準備側、すべての学生にとって、彼らが一層勉学に励む契機となるようにと願ってやまない。

(瀧本佳容子)

コンペティション入賞者一覧

■論文部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金賞	木	法・2	鐔 京香	直島アートプロジェクトの評価 —真に「成功」し、地域活性化に貢献しているのか—
銀賞	水	理・1	萩原 大尋	災害時における現行の電力復旧方法に関する検討 —令和元年の台風15号による停電を題材にして—

■プレゼンテーション部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金賞	水	経・1	白井 颯太	新しい教育に即したモラルジレンマ資料の有用性と実現可能性
銀賞	水	経・1	山井 美澄	児童養護施設の子供たち —教育的観点から—
銅賞	木	文・1	北嶋弥那子	なぜ日本で「小学生ファッション誌」は流行したのか? —ファッション誌にみる、「自己啓発性」について—

学習相談

アカデミック・スキルズの修了生の有志が、相談員(ピア・メンター)として、日吉メディアセンターで、学習に関するさまざまな相談を受け付けています。

「半学半教」の場としての学習相談

私たちピア・メンターは、秋学期もレポートの書き方、抽象的な課題への対処法など幅広い質問に対応しました。ピア・メンターの「ピア」は仲間・同輩という意味を持っています。学部生として、相談者と同じ立場であるということを活かし、親身になって相談に乗ることを強みとしています。はじめは不安そうな顔をしていた相談者が帰りには笑顔でお礼を言ってくれた時、こちらもとても嬉しくなります。さらに、相談に乗ることはピア・メンター自身の学びにも繋がります。学習相談は、まさに「半学半教」の場なのです。

(文学部2年 山井瑠子)

※学年は2019年度のもの

「創造力とコミュニティ」研究会

2018年度に発足した「創造力とコミュニティ」研究会では、地域コミュニティの活性化に参加するアーティストや個人・団体の実践を考察するために、2019年度も引き続き、創造力を通して活動を展開、あるいはこれから参画しようとしているアーティストやNPO団体の方々を話題提供者や講師としてお呼びし、話を聞くと同時に参加者による話し合いの場を設けました。本年度は以下の4回の研究会を開催しました。

第4回 アーティストとコミュニティ～
ダンサーの私がコミュニティを考えるわけ
(2019年9月25日)

第5回 アーティストとコミュニティ～
音楽家の私がコミュニティを考えるわけ
(2019年10月30日)

第6回 「おいしい」はアートだ！～食とコミュニティ
について考える (2020年1月31日)

第7回 わたしと「コミュニティ」なるもの
(2020年3月24日)

残念ながら、2月27日に開催予定だった横浜市のアートとコミュニティ活動の委託事業を行っているNPO法人STスポットの代表者をお呼びしての研究会は、COVID-19(新型コロナウイルス感染症)予防のために急遽延期となりました。しかし、開催されたとの会でも学生や大学教職員のみならず、一般の参加者も集めて活発なディスカッションが展開され、このような時期こそ、コミュニティ内の助け合いの重要性が再確認されました。(横山千晶)

教養研究センター選書20

『理性という狂気—G・バタイユから現代世界の倫理へ』

本書の「おわりに」に記したように、この本は「筆者がバタイユ研究を通じて得た問題意識を、現代のより広い人間と社会をめぐる問題意識に発展させていく試みとして執筆」されました。実は、執筆の直接の契機は、教養研究センターが設置する2つの科目の授業経験です。「アカデミック・スキルズ」、そして「生命の教養学」のオムニバス講義一回分を担当するなかで、真面目で意欲的な学生さんが(はじめは)折々のぞかせる、「理性的であること」へのピュアな信頼に、はっとさせられたのでした。理性が恐るべき破局の担い手となる事態を人類の歴史は知っており、ますます知ることになるかもしれません。この事態を直視した20世紀フランスの思想家バタイユの思索を手がかりに、理性の暴走を視野に含んだ現代的な「倫理」の可能性を考えてみたつもりです。

(石川学)



日吉行事企画委員会(HAPP)

秋学期のHAPPの活動

2019年度秋学期において慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会(以下HAPP)は、従来通り、春学期中に公募を行い、審査を経て採択を決定した企画の実行を核とした活動を展開しました。しかしながら今年度は、採択に至った企画の数が少なく、教員企画1件、学生企画が1件という結果でした。前者は、国連UNHCR WILL 2 LIVE Cinema(旧「難民映画祭」)の学校パートナーズとして、10月から11月にかけて行われた「Keio Refugee Week 2019」でした。数年にわたり継続的に行っている、展示、講演、映画上演が含まれたイベントでした。後者は10月から12月という長期にわたる、「慶應義塾南三陸プロジェクト活動報告(2011～現在)」と題された展示です。タイトルにあるように、「南三陸プロジェクト」が一区切りを迎えたことを記念し、これまでの活動を紹介する展示となりました。いずれも活気のある催しとなり、地域住民を含むたくさんの来場者にお越しいただきました。HAPPの活動が、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくことに確実に貢献していることが確認できました。HAPPの活動については、下記のWebサイトををご覧ください。

<http://happ.hc.keio.ac.jp>

(石井明)



《2020年度教養研究センター選書 原稿募集》

教養研究センターでは、2003年度以来「教養研究センター選書」を刊行しております。この企画は、当センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投じ、研究・教育相互の活性化を目指そうとするものです。

■応募資格 教養研究センター所員(共同執筆も可)

■内容 研究分野は問わない。学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で、先端的な研究成果を紹介し、学生や一般読者に新鮮な知の形成に立ち会う機会を提供するもの。

■申込締切日: 2020年7月22日(水)

■原稿提出締切日: 2020年9月25日(金)

●詳細は別途所員宛にご案内しました募集要項をご確認ください。

新型コロナウイルス感染症流行にあたっての 教養研究センターの姿勢について

2020年初頭からはじまった新型コロナウイルス感染症の流行によって、慶應義塾大学は、卒業式の中止、入学式の延期を始め、学事日程の大幅な変更を余儀なくされました。学生、教職員が一つの場所に集まって膝を突き合わせて共に学ぶ場を「塾」と呼ぶとすれば、人が集まることが制限される昨今の状況は研究教育機関としての慶應義塾にとって最大の試練と言えます。

この状況を踏まえて、教養研究センターは、慶應義塾の方針のもと、学生の安全と健康に最大限の注意を払いつつも、教養研究センターの使命を見失うことなく、研究教育機関としての社会的責任を果たしていく所存です。特に春学期については予定された全ての催事について変更を余儀なくされていますが、教養研究センターは、この状況をただ受動的に耐え忍ぶばかりでなく、むしろ、一つの機会ととらえ、新しい教養研究・教養教育の方法を模索していきたいと思えます。

「教養」は、不要不急なものではなく、人間にとって絶対的に必要であり、生きていく上でなくてはならないものです。いかなる逆境にあっても教養の灯を消してなりません。そのような決意でこの状況に臨んでまいりますので、日頃、教養研究センターの活動にご理解をいただいている皆様に変わらぬご支援をなにとぞお願いいたします。また、提言がありましたら是非とも教養研究センターにお寄せください。

2020年4月1日

教養研究センター所長 小菅隼人

私の昔とった杵柄自慢

ずいぶん昔の話だが、じつは大学院に進学するまで本気で漫画描きをめざしていた。中学時代の美術部の友人がたまたま詳しく、彼から道具やら何やら漫画家になるために必要な知識を授けると、3年の春には意気込んで第一作を投稿するももちろん落選。これに懲りずに高校3年の春には某大手少年誌に第二作を投稿するも再度落選……したのだが、今度は結果発表の数日後になんと編集者から電話がかかってきた。見込みはあるので次はネーム（※下書き）から見てくれるという。顔も知らない赤の他人が自分の描いたものをはじめ評価してくれたあの瞬間は、自分の生涯で最も嬉しかった瞬間トップ3にいまだにランクインし続けている。

いろいろあって漫画からは手を引いたいまも、昔とった杵柄で時折そういう仕事が入ったりするのはやはり楽しい（※イラスト参照）。ともあれ最近、最後に辿り着いたのがこの業界でよかったと心底思う。時間にルーズなメ切破りの常習犯には絶対に週刊連載など務まらない。きっと大学は世間よりも時間がゆっくり流れているにちがいない（と信じている）。往生際の悪い謝罪メールにいつも寛容に応じてくださる（と信じている）同僚と編集関係者諸氏への感謝を胸に、今日も私は目の前の（あるいはすでに背後の）次のメ切に向かっていく。

（商学部 西尾宇広）

※母校の職組のニュース「Lター」

タコマ漫画「かんぱれマルクスくん！」連載中です。

